

海外におけるアディクション看護教育の文献検討

坪井美恵子¹⁾ 内野小百合¹⁾ 千葉靖子¹⁾ 荒木とも子²⁾

1) 防衛医科大学校医学教育部看護学科

2) 東北文化学園大学医療福祉学部看護学科

【目 的】

アディクション（addiction）とは、「好ましくない習慣によって生活が破綻した状態」のこと¹⁾である。わが国では経済や情報の急成長，家族機能の変化などを背景に，従来のアルコールや薬物などに限らず，買い物やゲームなど様々な習慣的行動への依存が増加している²⁾。多様な医療・生活ニーズに看護職が応えるために，看護職者・看護学生へアディクション看護を教育する意義は大きい³⁾。わが国では一般病棟看護師のアディクション認知度は15.3%⁴⁾と少なく，実践に繋がっていないことが示唆されている。また，継続教育も含めその研究数は少ない。本研究の目的は，わが国のアディクション看護教育への示唆を得るため，他国のアディクション看護教育の現状を明らかにすることである。

【方 法】

データベースのCINAHL，PsycINFO，Scopusを用いて文献検索を行った。対象期間はそれぞれ収録開始年から検索日の2019年12月9日までであった。キーワードは「addiction nursing」AND「education」とし，抄録・査読・参考文献あり，英語論文に限定した。検索によりCINAHL33本、PsycINFO6本，Scopus22本ののべ61本がヒットした。抄録を参考に実践や尺度開発，患者教育などの内容，重複文献2本を除外し最終12本を対象文献とした。なお，本研究は公開されたデータベース検索の結果を用いて分析・検討を行っており，人や個人情報を対象とはしていない。

【結 果】

12文献（表1.）の発表は1988年が1本，2000年から2010年が6本，2011年から2019年が5本であった。内容は基礎教育5本，大学院を含む継続教育5本，その他が2本であり，対象国はアメリカとイギリスが各4本，ブラジル2本，カナダとオーストラリアが各1本であった。1988年，Murphyらはアメリカ社会にアディクション看護の専門性発揮が求められる一方，大学教育レベルの教育では対応が難しいと述べ，「研究数の増加」「理論開発」「実践に備えた専門教育プログラムの開発」を課題に挙げ，以降研究数が増加していた。2000年代，カナダやブラジルもその教育不足を報告し，カリキュラムの見直しや研究増加が課題とされていた。

看護基礎教育では，当事者参加型授業は学生の対象者への否定的態度を変化させる（Martineら，2003）との報告があった。一方でClancyら（2019）は，臨床実習により学生の「患者への介入意欲」が低下したと報告し，臨床における優れた実践を行う指導者の必要性を述べていた。さらに看護継続教育では，看護師への教育によりその知識量と共に患者の知識量も増加すること，看護系大学院でのSBIRT（Screening, Brief Intervention, Referral to Treatment）研修が学生の知識や態度，介入への自信を高めたことが報告されていた。

【考 察】

他国でもアディクション看護教育は重要なテーマとなっていた。2000年初期からアメリカ他で実態調査が行われ，アディクション看護の研究数増加・カリキュラムの見直し・専門教育プログラムの開発などが課題となっていた。現在は教育プログラムや研修の開発，効果の評価の報告が増加していた。教育介入により，看護学生や看護師のアディクションに対する知識，対象者への否定的態度が変化すると共に，対象者も知識量の増加や行動変容など良い影響を与えていた。

保険制度や看護師教育制度，看護師の働き方や多職種参入割合など，国ごとに違いはあり，単純に比較や導入はできない。しかしわが国においても，まずはアディクション看護教育と実践に関する研究数を増やし，看護実践につながる教育方法やプログラムを開発することが求められる。

<参考文献> 1)宮本真巳，安田美弥子編：アディクション看護。医学書院，東京，2008。 2)斎藤学：嗜癮論からみたサバイバー―ACから「男らしさの病」まで。 3)松下年子，田辺友理子，林美由紀：看護基礎教育におけるアディクション看護の教育の現状－看護系大学および看護専門学校を対象とした質問紙調査より－，アディクション看，16(1)：57－70，2019 4)内野小百合，小室葉月，松下年子：総合病院の外来 および一般病棟に勤務する看護師による多量飲酒のアセスメントと介入－その実態および知識・経験との関連－，アディク11 ション看，16(2)：15-23，2019

表1. 文献一覧

	年	テーマ	著 者	国	目 的	対象・方法	結 果	結 論
文献検討	1988	Addiction nursing: An agenda for the 1990s	Murphy, S. A.	米	現在の看護においてアディクション看護の専門性の意味と課題を明らかにする。	近年の報告書，研究のナラティブ・レビュー。	アディクション看護の専門性発揮が社会的に求められている。一方で，現在の看護大学教育レベルでの教育内容では対応が難しい。	1990年代の課題として「看護研究数の増加」，「理論開発」，「経験的・理論的実践を備えた実践者の専門教育プログラム開発」の3つが示唆された。
	2007	Looking back and thinking ahead about substance misuse: Fifty years of practice in the Canadian nurse	Marcellus, L.	カナダ	アディクション看護における歴史的テーマと現代的テーマを示し，物質使用障害と看護実践の新たな課題を述べる。	カナダ看護協会の公式のジャーナル『Canadian Nurse』，1953年～2003年の物質使用障害に関する記事内容をレビュー。	「問題の蔓延」，「物質使用障害理論とモデルの進化」，「医療専門家の物質使用障害に関する教育不足」，「研究の必要性」，「治療と健康増進の重要性」，「物質乱用に対し政治は直接影響を与える」という6つのテーマが明らかとなった。	看護師は医療提供者の最大のグループであり，病院とコミュニティにおいて多くの人が繋がる最初の人である。物質使用障害の影響として，社会的要因にも注意する必要性があり，看護が成すべきことを考える必要がある。
基礎教育	2003	Examining the relationship of addiction education and beliefs of nursing students toward persons with alcohol problems	Martinez, R. J., et al	米	看護学生への物質依存，特にアルコール依存について，2つの教育法の有効性を検討する。	・看護学生に教育を実施（グループ1：30名；講義のみ，グループ2：45名；講義と当事者との対話あり），事前・事後・3か月にテストを実施。 ・知識とアルコール患者への見方の2側面を評価。	両グループは知識と見方のいくつかで点数が上昇した。しかし，グループ2はグループ1よりも全体的に優れた知識と，より正確な見方を示した。	アルコール依存症患者への知識・見方は，講義のみでも望ましい方向へ変化した。当患者の誇りは，学生の見方をより現実に沿ったものへ変化した。看護学生は認知度の向上を，教育によって変化し得ることが示された。
	2004	Nursing students' perceptions of the curricula content on drug and alcohol education in Brazil: An exploratory study	Pilon, S. C., et al	ブラジル	看護学生は物質使用障害者についての教育実態と，ケア経験の認識を明らかにする。	・ブラジルの25（連邦12，公立6，私立4）の看護大学に在籍する看護学生425名（平均24歳，85%が女性，83%が4年生）に質問紙調査を実施。 ・独自に作成した20項目の質問紙を使用。	看護学生の大半が，3～4年目に精神看護分野で薬物とアルコールの教育を4.8時間受けていた。内容は，37%は理論，26%が臨床展開，6%がグループディスカッション，3%が研究であった。学生は物質使用障害を精神疾患と認識し，医師/疾患モデルで受け止めていた。	ブラジルでは，看護学生に対する薬物とアルコール依存・乱用に関する教育は限定的であることが示唆された。公衆衛生上のニーズを満たすため，看護師の教育カリキュラム見直しが必要である。
	2013	Confirming the factor structure of the alcohol and alcohol problems questionnaire (AAPPQ) in a sample of baccalaureate nursing students	Tierhorst, L. et. al.	米	臨床医用の態度尺度「アルコールとアルコール問題に関する認知度アンケート（AAPPQ）」を，看護学生用に改良する。	・アメリカ北西部看護大学の学生299名（女性86.6%，白人90.4%）に質問紙調査を実施。 ・データの探索的・確認的因子分析を実施。	35年前に開発された30項目6因子のAAPPQ（Anderson & Clement, 1987）を使用した。3項目（19・20・25）を削除した27項目7因子の構造が看護学生には最適であると確認された。	臨床経験のない看護学生に最適な「アルコールとアルコール問題」に関する認知度アンケート（AAPPQ）」が確認できた。
	2019	Getting Addiction Into the Nursing Education "Water Supply": A U.K. Case Study	Clancy, C. et. al.	英	看護学生のアルコールと他薬物に関する認識と教育実態を調査する。	・3年制の看護学生242人。学生は2年目に成人と小児，精神分野を選択できる。アルコールと薬物についての教育履修前の1年目，履修後の2，3年目に知識とスキル，役割について最終データを収集。また，精神分野の16人にフォーカスグループインタビューを実施し，質的データを収集。	教育後「重要だと思う」認識のスコアは全分野で上昇した。しかし，学生の知識とスキル向上の有意な増加はなかった。「治療へのコミットメント」は，精神分野が他分野に比べて高かったが，薬物に対し3年目に大きく低下がみられた。インタビューからは，臨床実習における薬物使用環境と患者との関わり，看護師の態度などが，学生の「治療へのコミットメント」にマイナスの影響を与えていた。	教育により，学生の物質使用障害者への「否定的態度」や「無関心」さが減じた。しかし臨床実習により薬物使用障害への「治療へのコミットメント」が低下した。臨床教育環境も教育戦略の一部とみなす必要がある。臨床においてロールモデルとなる指導者が必要である。
継続教育	2007	Role development and career stages in addiction nursing: An exploratory study	Clancy, C., et. al.	英	アディクション看護師の雇用と定着，キャリアステージと役割獲得，その実質に影響する要因を明らかにする。	・ロンドン及び南西地方，26人の看護師（17人男性9人女性），平均年齢は38.5年に約90分のフォーカスグループインタビューを実施。 ・データはBurnardの内容分析を用いて分析。	募集と定着に影響するポジティブな因子は，労働環境の事前知識（看護学生時），自律的実践の機会，患者の希望，関連する治療とケアアプローチであった。本人の志気，忍耐力，寛容さに加え判断しないことが，アディクション分野で働く看護師に求められていた。	今後，雇用主や看護管理者より，看護学生の学習機会の増加，専門病棟での実務経験が望まれるかもしれない。
	2007	Predictors of course satisfaction and perceived course impact of addiction nurses undertaking a postgraduate diploma in addictive behaviour	Rassool, G. H., et. al.	英	薬物・アルコールに関する専門看護師の継続教育の有効性と影響を明らかにする。	・健康行動の大学院課程46名の学生を対象に薬物乱用の予防・管理・治療のための知識で構成され，実践看護師育成を目的としたコース（2週間の学習，1週間の実習，コース修了6ヶ月フォローアップ）を実施。 ・モジュールの学習成果と学生の実践満足度を調査する。	「健康教育と予防」モジュールへの期待がコースの満足度の重要な予測因子であり，「特定の集団（児童思春期・妊婦）」モジュールが専門的実践への影響の予測因子であった。 現在，アディクション研究における教育プログラムの評価研究がほとんどとなくない。長期的影響に焦点を当てたカリキュラム開発と評価枠組みの開発が必要である。	アディクション看護師の実践開発教育プログラムの効果と短期的影響が示唆された。臨床配置が専門的実践に大きな影響を与えていた。
	2009	Stigma reported by nurses related to those experiencing drug and alcohol dependency: a phenomenological Giorgi study	Lavi, R., et. al.	豪	依存問題を抱える人への日々の看護ケア経験を記述する。特にスティグマについて振り返る。	・クイーンズランド州南東部のアルコール・薬物部門で働く看護師（Rn）4名（35～58歳）にインタビューを実施。 ・データはジョルジの現象学的方法で分析。	看護師は，日常の勤務の中でスティグマを経験しフラストレーションを感じていた。1) 不適切な判断，2) アドボカシー，3) 教育，の3つでスティグマの現象が確認された。	アルコール・薬物部門で働く看護師の生きた経験を抽出できた。スティグマについて，看護大学のカリキュラムに組み込むことで，対処できることが示唆される。
	2011	Nurses in alcohol and drug community mental health services: training and quest for knowledge in the field	De Vargas, Divane et. al.	ブラジル	看護師の，物質依存に関するトレーニングと知識源を特定する。	・2007年9月～12月にかけてサンパウロ市の物質依存症センターで働いていた16人の看護師を対象に日記式質問紙調査を実施。 ・データはテーマ別に内容分析を行った。	回答者の68.8%がアルコールや他の薬物についての特別なトレーニングを受けていなかった。また93.8%は，看護学部で当分野の授業を受けていなかった。参加者は関連資料や定期刊行物，オンライン情報やチャットメンバーとの日常的やりとりを知識源としていた。	正式な看護教育における精神依存性物質分野のトレーニングが不足していることが示された。そのため，「看護師は知識獲得のために，（活用できるとは限らない）情報を使用していた。
	2016	Patient Opioid Education: Research Shows Nurses' Knowledge of Opioids Makes a Difference	Castello, Margaret	米	オピオイドの安全な使用に関する看護師の教育的介入が，その後の看護師と患者の知識を改変したか否かを明らかにする。	・60床の消化器外科病棟看護師53名を対象に，オピオイドの安全な使用に関する教育を実施（40分），外科手術を受け経口オピオイドを処方された患者（前3名，後10名）に電話調査を実施。教育前後で，看護師および患者の知識を比較。	看護師の教育前後で，看護師の知識量（保管方法・減速方法・依存リスクなど）は有意に増加した。さらに，看護師の教育介入前後で，患者の知識量も有意に増加した。	短時間の教育介入により，看護師のオピオイド使用，保管および患者に関する知識量が増加した。看護師の知識量の増加は，退院患者のオピオイド使用に関する知識の増加と一致した。
	2018	Distance Versus On-Site Educational Strategies for Competency-Based Screening, Brief Intervention, and Referral to Treatment Education	Kelly, P., et. al.	米	物質使用障害予防のSBIRTトレーニングに関し，大学院看護学生の教育方法（現場・遠隔）の違いによる差を明らかにする。	・家族・成人/老年看護の大学院修士Nurse Practitioner (NP) 学生に対し，現場教育（45人）と遠隔教育（18名）の2つの方法で教育を実施。学生は教育前後での知識・態度・学習効果を比較。	両グループ，教育により知識，態度，物質使用患者のスクリーニングと介入への自信，教育の満足度いずれも高まった。遠隔教育グループと比較し，現場教育グループは役割の妥当性や適切性，支援への態度がより積極的であり，満足度も有意に高かった。	教育方法は双方ともSBIRTの知識とスキルを高める効果的な指導方法であった。しかし，遠隔トレーニングをデザインする際は，知識・教育満足度について考慮する必要がある。

発表に関する開示すべきCOIは特にありません。